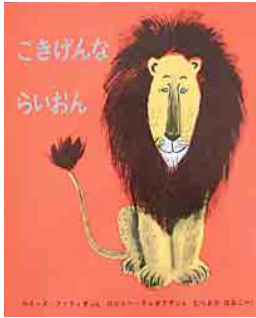


ごきげんならいおん

ルイズ・ファティオ 文
ロジャー・デュボアザン 絵
むらおかはなこ 訳
福音館書店 1964年 1000円



動物園にいつもごきげんなライオンが住んでいました。ある日飼育係が家の戸を閉め忘れていたのに気づいたライオンは、いつも親切な町の人たちに自分から会いに行こうと考えつきます。ところが、みんなライオンを見ると驚いて逃げ出してしまいます。町の人たちのあわてぶりと、なぜ怖がられるのかわからないライオンの様子が笑いを誘います。3色刷りのユーモラスな絵がお話を引き立てています。

こねこのびっち

ハンス・フィッシャー 文・絵
石井桃子 訳



岩波書店 1987年 1500円

こねこのびちはほかの動物にあこがれて、おんどのまねをして2本足で歩いたり、あひるのまねをして泳いだりしてみますが…。やっぱりねこが一番だと気づきます。すみずみまで描きこまれた絵が、明るく楽しい絵本です。びっちやほかの動物たちが表情豊かにユーモラスに描かれています。姉妹編に「たんじょうび」があります。

サリーのこけももつみ

ロバート・マックロスキー 文・絵
石井桃子 訳



岩波書店 1986年 1700円

小さな女の子サリーは、おかあさんとジャムにするこけももをつみに山へ行きますが、つんでは食べしているうちにはぐれてしまいます。ちょうどその頃、山の向こう側にはくまの親子がこけももを食べに来ていました。この2組の親子は、こけももの茂みのなかで相手を取り違えてしまいます。紺1色の絵で、広々とした山の様子、サリーとくまのいたずらっぽい表情が見事に描かれています。